国立市公民館 70 周年記念 式典・リレートーク・講演

11 月 2 日(日)13:00~15:30 @国立市公民館 地下ホール

わたし(たち)にとっての「くにたち公民館」
―「ともに学ぶ」ってどんなこと？―

公民館が開館して７０周年を迎える１１月に、「ともに学ぶ」ことの意味や公民館のあり方について、みなさんと考えるイベントとして開催します。
（共同企画・運営：70 周年事業をともに考える会）

次第

司会：池田弓子（公民館 70 周年事業をともに考える会）

1. **― 記念式典 ― 13 時 00 分～13 時 25 分**
   - 趣旨説明
   - 市長・教育長あいさつ
   - コーラスグループ「ハートヴォイス」合唱

2. **― 公民館で活動する市民のリレートーク ― 13 時 25 分～13 時 55 分**

   登壇者
   - 北島多佳子（障害をこえてともに自立する会）
   - 杉原広子（近代思想研究会）
   - 三谷桂子（ＫＵＮＩＦＡ 日本語サポート）
   - 森川健治（身体表現講座参加者）
   - 山上眞依（ゼロエミッションを実現する会・国立）

休憩 13 時 55 分～14 時 05 分

3. **― 記念講演「言葉が自由に行き交う心地良さ」― 14 時 05 分～15 時 05 分**

   講演：長谷川宏（哲学者）

ヘーゲルやマルクスの翻訳書や『日本精神史』（講談社）など多数の著作がある在野の哲学研究者。公民館では、２００４年より市民と哲学書を講読する連続講座の講師を務め、市民による哲学書の読書会が生まれるきっかけを創られた。

全体質疑・閉会あいさつ 15 時 05 分～15 時 30 分

※進行により時間が前後する可能性があること、記録用に写真撮影・録音を行うことについて、あらかじめご了承ください。

喫茶「わいがや」の飲み物（コーヒー等）を会場にて特別価格で提供します。

当日は来館者の方に、国立市公民館開館７０周年を記念してオリジナル缶バッチを配布します！

コーラスグループ「ハートヴォイス」合唱

この道が好き

作詞　北島多佳子
作曲　遠藤　信男

一、この道が好き
春になると　ピンクになる道
花びら舞い散る中を　歩くのが好き
いつも　通る
駅まで続く　長い道

二、この道が好き
夏になると　みどりになる道
何気なく一人木陰で　休むのが好き
いろんな人に
今日も出会える　並木道

三、この道が好き
秋になると　黄色になる道
カサカサ音を立てて　歩くのが好き
晴れた朝には
たき火の煙　匂う道

四、この道が好き
冬になると　茶色になる道
歩道橋から見える　白い駅が好き
あたたかい日に
散歩したくなる大学通り

ハートヴォイス
歌を楽しむワークショップ

と　き：11月22日(土)10：30～12：00
ところ：FSXホール　地下スタジオ
企　画：ハートヴォイス

ハートヴォイスは、月に１回第４火曜日10時から練習をしています。今回はお客様にも、体操、発声、曲を体験していただき、最後に団員の歌声を披露します。

リレートーク　北島多佳子さん　参考資料

していただけるのではないでしょうか。

岩間　初めて、実行委員として行事にかかわりをもってみますとほんとうに裏方さんの大変さというか、一つの行事をするのにこんなに大変なものかということがほんとうにわかりました。これからもこのような行事に関心をもって、積極的に参加していきたいと思います。

館長　ふれあい音楽会としては第一回めということで、いろいろ難しさがあったと思います。今回はそれぞれのサークルが独自で参加したということですけれども、今後このような企画が進められたときにはぜひ多くのサークルが、いっしょに連帯できて、一つの大合唱ができたり、若い人のバンドで熟年の人が歌を歌ったり、踊ったりできるようになれば、ほんとうの〝ふれあい音楽祭〟になると思います。

石井　急にメインの人がいなくなって、それからがんばられたでしょう。ほんとうに大変だったと思います。ごくろうさまでした。

岩間　ほんとうにみなさまに助けられて、司会も「国立話し方勉強会」の中浦さんと岡部さんにやっていただいて、いろいろ盛り上げていただきました。

司会　二日目の式典はいかがでしたか。

三浦　私はなにもやらないようなものです。ただ、北島さんの介添えをやっただけです。

館長　ただ、あそこまでやるには段取りが大変だったろうと思うんですね。

三浦　式典の参加者が少ないといけないと心配していましたが、実行委員の皆様も出席していただいて、立っている人までいてほっとしました。

館長　あの時点では藤田さんたちはどこにいたのですか。

藤田　私たちは南側の庭にいて、パーティの準備でおおいそがしだったんです。

司会　式典での皆さんのおはなしはとってもよかったですね。

三浦　普通の式典だと、形式的なごあいさつが多いんですが、とても暖かみがあって、……少し話が長い人もいたようですが、お話に実があって、おもしろいし、皆を飽きさせないような内容でやはりおじょうずですね。

一人一人挨拶がそれぞれの味があってよかったです。特に北島さんのお話はほろりとしましたね。体を支えていたのですが、肩もぴっしょり汗をかいていて、緊張して足が上がってしまうのを一生懸命おさえているのを見て、ここで私が泣いたらみっともないなんて思いましたけれども、感激しましたね。よくあれだけ読めましたね。

佐藤　私も泣けてきました。

石井　少し式典が延びたので、獅子舞いの人たちが次に行く時間が決まっていて、気が気ではなかった。

館長　私もそのことを知っていま

30周年記念式典祝辞

私と公民館

北島　多佳子
（障害をこえてともに自立する会）

私は公民館の中にあるわいが屋で働いている、北島です。スタッフとして毎日のように通い始めて二年半ぐらいですが、私はこの公民館が新しくなる時、富士見台の方に仮公民館があり、その時から来るようになりました。

今日は三十周年ということですが、私は昔の公民館には一度もいったことがありません。公民館ときくと谷保の方に住んでいる私にとっては、とても遠い感じがして、どんな活動があるのかもよくしりませんでしたので、なかなか行く機会がありませんでした。

私は八年ぐらい前、コーヒーハウスの活動を知り、その時みんなの手づくりのクリスマス会に参加したのがきっかけで今もこうして来ています。

私は家から電動車椅子できているのですが、こんなふうにどこへでもいけるようになったことや、このように大勢の人の前で話せるようになったことも、また、色々な人と出会ってたくさんの友だちができたこともコーヒーハウスにかかわってきたからこそ出来たことだと思っています。

私は養護学校に行っていたので学校に行けば、障害者ばかり、家に帰れば、近所の人との関係だけ、そして公民館に来るといままでとは違った同世代のなかまにあえ、私にとっては新しい場所でした。それで、自分の力で来れるようにしたいと思うようになりました。電動車椅子があっても外を走る自信がなくてほとんど外にはいけなかった私なのですが、今では四十分もかかる道のりもちっとも大変だとは思いません。国立の周辺ならどこにでも行けるという自信がついたし、何か困ったことが突然おきても大丈夫だと思えるようになりました。

コーヒーハウスの活動の一つ一つが私に少しづつ何事にたいしても自信をつけさせてくれたように思います。とても良い人たちと出会ったからこそ、そして、その人たちに会いたいと思うことで、青年室に行けば誰かと話せるとか、皆と一緒に何かを作りたいとか、電車やバスにのってワイワイガヤガヤと遊びに行くことなどが私の行動範囲をひろげることに繋がっていきました。人と人との関係がうまくいかなければ、今のような私にならなかったかもしれません。

今、わいが屋で働いていますが、おみせにいても色々な人に接する事ができます。そして、公民館を利用している様々な人となにげなく会っているうちに、行き帰りのなかで、声をかけてくれる人と人との関係ができとてもうれしく思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

公民館での活動の中からこれからも頑張っていきたいと思います。わいが屋にもおいでください。

令和６年度国立市市民表彰　社会福祉功労

“しょうがいしゃが暮らしやすい”まちの実現を目指して諦めない心

北島　多佳子氏

幼くしてご自身がしょうがいをもち、車いすの生活となりました。地域で暮らす中でこれまで何度も障壁にぶつかりましたが、“しょうがいがあっても地域とのつながりをなくさない、人と人として関わる”しょうがいしゃが暮らしやすいまちの実現は、みんなが住みやすいまちになるため、諦めない心をもってお伝えしています。

しょうがいしゃが暮らしやすいまちの実現のために、これまでされてきた具体的な活動内容について教えてください

大別すると、団体での活動と個人的な活動があると思います。団体は国や市の制度に関する問題、あるいは駅のバリアフリー化のような大きな課題に取り組んできました。平成17年（2005年）には市の「しょうがいしゃがあたりまえに暮らすまち宣言」の宣言制定検討会の一員として参画しました。

個人的な活動としては、学校を訪問して車いすの講話や車いす体験、ボッチャの普及活動など行っています。

活動している中で意識していることや大切にしていることを教えてください

“しょうがいがあっても地域とのつながりをなくさない。人と人として関わる。”具体的に言うと、車いすが通りやすいまちは、お年寄りや子ども、妊婦さんにとっても使いやすいと思うので、気づいたことは市へ伝えていくようにしています。

例えば、多摩障害者スポーツセンターの角の横断歩道と車道に溝があり、車いすを手漕ぎで操作する人にとっては前車輪（キャスター）がひっかかり転倒したり、ケガをすることが多いです。電動車いすでは簡単に通れても手動車いすは少しの凸凹の段差が危険なので、市に伝えて直してもらいました。

他にも、甲州街道の歩道に伸びてきた木の枝を切ってもらいました。おかげで私はもちろんのこと、自転車の人も歩く人もベビーカーを押す人も、みんなが今は通りやすくなっています。まちは色んな人が関わって住みやすくなります。

さらに、矢川駅のバス停はちょうど車いすのスロープを引き出すところに花のプランターがありました。うまく止めることが出来ず運転手さんが苦労していたため、市に相談したところ解決することができました。

活動を通して印象に残っていることを教えてください

国立駅の京王バス・バス停は乗り場の幅が狭く、真ん中に柱が立っているため車いすの車輪がはみ出してしまいそうで、いつも怖かったです。しかしある時から幅が大幅に広くなり、とても驚きました。諦めきっていたことが突然叶ったのです。あまりに嬉しかったので、京王バスのお客様係に「安全で乗りやすくなりました」とお礼の手紙を出しました。この印象的な出来事を機に、諦めないで伝えていくことを大事にしてきました。

活動を通して嬉しかったことを教えてください

市内の学校に行くと、まち中で子どもたちに会うことがあります。その時子どもたちから声をかけてくれて、私の方はどこの小学校か覚えていないので聞き返すことも多いですが、私のことを覚えていてくれて嬉しかったです。

また、自宅前の歩道には車いすに当たる雑木があり、危なかったため市役所に話しに行きました。東京都の管理のためすぐの対応は難しいとのことで、半ば諦めていたら、後日綺麗になくなっていました。市の人が頑張ってくれたんだなぁと嬉しかったです。

今後の活動及び展望などを教えてください

市内の小学校や高校などに訪問したいです。いつも私が学校に伺う前に車いす体験をしているので、少しは理解してくれているみたいです。車いすでも電車やバスにも乗れるし、買い物をしたり食事に行ったり、みんなと同じようなことが出来ると知ってもらいたいです。

また、展望がもう一つあります。国立で生まれて育ったこの町が大好きで詩を作りました。「この道が好き」の歌をみんなに歌ってもらいたいです。そして市内のイベントなどで歌ってもらえるような歌になって欲しいと思っています。

（次ページへ続く）

この歌は私が25歳、養護学校を卒業して初めて電動車いすで公民館内にある「喫茶わいがや」に通った時の誇らしい気持ち、世界が輝いて見えた気持ちを歌ったものです。わいがやは健常者としょうがい者が一緒に働ける場の第1号でした。自宅と養護学校をスクールバスで往復するしかなかった私が、誰にも頼らず一人で国立駅舎に向かって歩くのは最高の気分でした。わいがやは今も健在で、今回の表彰で「障害をこえてともに自立する会」も一緒に受賞できたのは驚きと嬉しさでいっぱいでした。

▲左：家の近くの草木が生えて通りにくくなった所と、
右：切ってもらって通りやすくなった所の様子

この道が好き

一、この道が好き
春になると　ピンクになる道
花びら舞い散る中を　歩くのが好き
いつも　通る
駅まで続く　長い道

二、この道が好き
夏になると　みどりになる道
何気なく一人木陰で　休むのが好き
いろんな人に
今日も出会える　並木道

三、この道が好き
秋になると　黄色になる道
カサカサ音を立てて　歩くのが好き
晴れた朝には
たき火の煙　匂う道

四、この道が好き
冬になると　茶色になる道
歩道橋から見える　白い駅が好き
あたたかい日に
散歩したくなる大学通り

作詞　北島多佳子
作曲　遠藤　信男

リレートーク　杉原広子さん　参考資料

くにたち公民館だより

青い風が
わたる
駈けてゆく髪が
ひかる
遠くで
若い声が
はずんでいる
空には
陽を吸った雲が
ひとつ

発行　国立町公民館　東京都下国立町中区210　TEL (0425) 72—5142　印刷　滝口印刷所　山梨県富士吉田市

公民館で勉強しませんか

今日もまたあわただしく暮れてゆく。昨日もそうだった。体は忙しいのになぜか虚しい。こんな毎日のくり返しの中で、なに、とははっきり言えないが、なにかきちんと勉強したい、もっと自分を高めることをしたいと思っている方が多いのではないでしょうか。

でも、勉強したいと思っても、ひとりではなかなかはじめにくいものですし、方向を見失わずに続けていくことは、なお大変です。それをみんなで力を合わせてやってみようではありませんか。

ひとりではむずかしくても、みんなでなら出来ることがあります。「複数」というのは、馬鹿にできない力をもっているものです。

公民館で勉強しませんか。

ことしも公民館では、四つの婦人教室と市民大学セミナー、そして、ことしからはじまる青年教養大学などを計画しました。

ここでは、身の飾りにするような、そんな「教養」ではなく、自分の生き方を確かめ、生活ごと変えていく、ほんものの勉強をしたいと思います。

そしてまた、一緒に学ぶことを通して、ほんとうに理解し、協力し合える人間関係をつくりたいと思います。

婦人教室のうち三つは、それぞれの地域の人を対象に地元で開設します。また、乳幼児がいてわずかな時間も自由にならない若い主婦のためには、勉強の間こどもをみていてもらうことも工夫し合いましょう。

次のページにおおよその学習計画を載せました。自分にふさわしい教室を選んで申込んでください。

青年教養大学は、青年なら誰でも、男の人でも女の人でもいいのです。六ページをみてください。

また、市民大学セミナーは、いくつかのコースにわかれて、ひとりの講師のもとに、系統的な深まりのある勉強をします。くわしくは、次号6月号でおしらせします。

勉強したい、と思っていらっしゃる方は、一度、公民館へおいでください。

（写真は昨年の婦人教室風景）

第三回くにたち婦人教室受講者募集

＜富士見台婦人教室学習計画＞

月	学習テーマ	学習内容
6・7・8	現代に生きる日本人としての課題	現代とはどういう時代か。 民主的に生きるとはどういうことか。 戦後、婦人の歩みはどんなものであったか。 いま、何故学習しなければならないか、など現代に生きる日本人としての課題を学ぶ。
9・10・11・12	教育をめぐる諸問題と親の在り方	教育とはなにか。 いまの教育はどのようにな行われているか。 家庭や学校でのこどもの教育はどうあるべきなのか。 ＰＴＡの正しい在り方とはどういうことか。 婦人の集団活動はどうあるべきか。などいまの教育をめぐる諸問題について考え学ぶ。
1・2・3	地域社会と私たちの役割	国立町はどんな町か。その成り立ちと発展の歴史。団体のうごき。財政状況など町の現状と課題を知り、さらに地域社会に生きるひとりとして、これからの役割を考え合う。

◇富士見台婦人教室

開設期間—五月二十五日から明年三月まで　毎月第二、第四水曜日の一時半から四時まで
開設場所—第五小学校
学習内容—別表のとおり
対象—富士見台地区に住む婦人で全期間出席できる方なら誰でも
定員—五十名（先着順）
受講料—無料ですが、資料代として二百円お預りします。
申込み—国立町公民館富士見台教室係まで。電話（㉒五一四二）またはハガキで住所・氏名・年令・職業をお知らせ下さい。
申込み〆切り—五月十八日(水)五時
開講式—五月二十五日(水)一時

◇南部婦人教室

開設期間—五月十八日から明年三月まで、毎月第二、第四水曜日の一時半から四時まで
開設場所—第一小学校
学習内容—別表のとおり
対象—一小地区に住む婦人で全期間出席できる方なら誰でも
定員—五十名（先着順）
受講料—無料ですが、資料代として二百円お預かりします。
申込み—国立町公民館南部教室係まで。電話またはハガキで住所・氏名・年令・職業をお知らせ下さい。
〆切り—五月十四日(土)正午まで
開講式—五月十八日(水)午後一時半

＜南部婦人教室学習計画＞

月	学習テーマ	学習内容
5・6・7・8・9	こどもと教育の問題	いま目の前にいる子どもをどう育てるか。教育はどうしたらいいかということは広く国民全体の問題です。期待される人間像とは何か。町や都や国の教育費や教育行政はどうなっているか。子どものための教育施設、文化施設はこれでいいのか。いまのような時代の親子の関係や家庭教育はどうしたらいいか。ＰＴＡの正しいはたらきについて。など、教育の問題についていろいろ考えあいましょう。
10・11・12	生活と政治の問題	私たちの生活は全て政治につながるといってもいいすぎではありません。いま私たちが知らなくてはならない国、都、町の政治の問題は何でしょうか。税金のこと、公共料金のこと、社会保障や社会福祉、選挙や議会、地方自治と地域開発など具体的な問題を事実にそくして考えあいましょう。
1・2・3	生き方と考え方の問題	民主主義社会はひとりひとりが自分の生き方や考え方をしっかりと持っていなくてはなりません。私たち（の夫）は毎日何のために働いているのか。日本人は自分たちの生活をよくするためにどんなあゆみをしてきたか。とくに婦人のあゆみはどうだったのか。平和な世界や日本をつくっていくために、これからどんな生き方や考え方が必要か、ということについて考えあいましょう。

何よりも「公民館」について学ぶことになった

近代思想研究会　中山三平さん

◇市民大学講座・セミナーから

「近代思想研究会」を略して「近思研」と呼んでいます。

「近思研」のスタートは、1973年、国立に団地ができていったころです。当時、公民館の「市民大学講座」「市民大学セミナー」で、丸山真男さんとか久野収さんとか日本屈指の先生たちが講師に来ていたんです。そこに若いお母さんたちが子育ての最中に勉強しようと参加されたのです。そういうお母さんたちと一橋の大学院生がチューターで一緒に勉強してきたというのが「近思研」です。

これまでに読んだ本は膨大なものになります。一橋の歴史の先生の安丸良夫さんや中村政則さん、言語学の田中克彦さんなども出席され、終わった後、カラオケに行ったりもしました。「近思研」で取り上げるものは幅広く、名古屋大学の安川寿之輔さんを呼んで、福沢諭吉の批判を聞いたり、丸山真男も福沢諭吉を担いでいるから駄目だという話を聞いたりしました。

中山三平さん

「近思研」に入って何を勉強したかというと、何より公民館のことです。今日の会のタイトルに「広がってしまった」とありますが、「しまった」というのは普通「ああ、しまった」という使い方をしますよね。「近思研」に入ったら、公民館が有料化するという問題が出てきたり、職員の配転の問題が出てきたり、公運審なんかいらないという話が出てきたりしました。それで、「近思研」の会員が積極的に公運審の委員に出たり、『公民館だより』がつぶれそうだというのでたいへんだと「公民館だより編集研究委員会」をつくる提案をしたり、「近思研」に入っただけで、公民館のことにまで足を踏み入れて「しまった」んですよ。

◇市民と一緒に盛り上げていく活動を

そういうように「近思研」は単なる学習会とか読書会ではなく、学習の中から自分たちが行動するという会なんです。高嶋伸欣さんという歴史の先生にくっついてマレーシアまで行って戦争追体験の旅をしてきた人がいたり、福岡の軍事基地まで押しかけていって軍事基地反対の運動に参加する会員がいたり、公民館が有料化されそうだというので「公民館を考える会」というのもつくりました。

僕たちの会では、90歳になった人も岩波の『世界』を読んでいるんです。次回は『金融が乗っ取る世界経済』というような難しい本も読みます。公民館に入って世界が広がった、というのは「近思研」がまさにそうです。

公民館は公運審があること、無料、職員が専門性があることが大事です。今、期待しているのは、「市民メディア講座」のように公民館が市民と一緒になって盛り上げていくような活動だと思います。

「近思研 事始め」

奥原光子

――〈当日配布資料〉『月刊火曜日　TUESDAY』※創刊号（1993年11月）から転載――

※近思研発行の月刊誌（1993年11月～2004年5月103号まで発行）

市民運動の中で出会った大学生がこの町で始めた小さな塾。その塾の一部屋から読書会が始まりました。もちろん名前もまだありません。メンバーは、公民館での学習や市民運動を通して親しくなった数人です。スタートしてから3ヶ月程経った頃でしょうか。この会に参加した動機を書こうということになりました。1973年10月12日の日付で何人かの人がその動機と感想を書いていますが、今読みかえすと、とても貴重なものであることがわかります。

近代思想研究会が20年の間に取り上げた本は必ずしも歴史の本ばかりではありませんが、当初は歴史を学びたいという希求がそれぞれの中にありました。語り口はみな違いますが、「歴史にどう生きるかを探るために」「世の中をしっかり見極める洞察力をつけるために」学習したい。「歴史が過去との対話だけに終るのではなく現実と将来の生き方に深く関わるものである」ため。「ある事象を理解するためには、背景となるべき歴史の流れを知ることが大切」等々と述べ、歴史を学ぶことの重要性に触れています。

歴史の担い手は他ならぬ私たち自身なのだということを誰もが認識していたのです。それはあの時代背景にも大きく関係しているように思われます。世代を超えて、この時代を共に生きているという鮮烈な自覚。このような同時代感覚を書き手がみな持ち合わせていたからではないでしょうか。

60年代後半、大学闘争の中から提起された根源的な問いかけに、市民、労働者も呼応し、世界中が変革の予感に高揚していた熱い季節。誰もがまだ若く、輝いていました。

この時代を、歴史の一コマを、私も今こそ生きているのだと実感していた日々でした。少し大げさな言い方をすれば時代から受けたインパクトを内面化させて、近思研は出発したのだと思っています。私の動機はもう一つ、「西欧はキリスト教に基盤があるが、あらゆる発想の出発点となっているような形で日本人のものの考え方の軸になってきたものはあるのか」ということを考えたいと書いてあり、ある人は「その時代の中で生きた一人の人間に焦点をしぼってやってみたい」と記しています。

当初、読書会を進めるにあたっての方法は、

◇　時流に流れるものはやらない。

◇　それを基に自分が変わっていく。

◇　概説ではなく古典そのものを読む。

◇　分担を決めて各自がレポートをする。

というスタイルを採り、まず福澤諭吉著「学問のすすめ」から読みはじめました。

近思研には、個性の全く異なる二人のすぐれたチューターがいて、各々専門領域からの助言もあり、読書を進めていく上でとても大きな力となりました。たとえば諭吉の生きた幕末から明治期の日本の諸相。あるいは、諭吉が啓蒙思想を経て実学思想を形成するにいたった思想的系譜など……。今20年前のノートを拡げてみるとこの時期のホットな学習への取り組み方が伝わってきます。

その後国立の町の図書館ができて、会場を図書館に移すと同時に近代思想研究会という名前ができました。――

※（編集部注）その後近思研の会場は公民館に移り、現在は公民館で毎週火曜日に開催されている。

リレートーク　三谷桂子さん　参考資料

〈サークル訪問281〉

KUNIFA（くにふぁ）日本語サポート

毎週火・水・木曜日に行われる公民館主催の『生活のための日本語講座』が終わると、待機していた日本語ボランティアが外国人の方々に一人または二人ついて楽しそうな学習が1時間続きました。

KUNIFAは講座参加者のもっと日本語を学びたい、話したいという要望に応える活動をしています。今日初めて参加した中国人女性は、若いボランティア二人が訪れた広州とおいしかった屋台のスープの話に、一挙に親近感を覚えたようです。タイ人の女性は用意してもらった日本料理の写真を見ながら、おせち料理の作り方を教わっています。日本語理解が素晴らしいので驚きました。助けを借りながら講座テキストの復習をする方もいます。北京で日本語を学んだ女性は来日2か月、「おかげさまで楽しいです。またこれから勉強します」とお礼を言っていました。

土曜日は、留学生や仕事をもつ外国人と新聞を読んで考えを述べ合ったり、レポートの日本語表現の添削を行ったりします。

この会のスタートは1992年、代表の大熊ゆう子さんはサークル歴10年になります。「外国人の方々が安心できるように同じボランティアがついて、継続的な人間関係を作っています。そのため信頼感が生まれ、時に職場での悩み、子どもの教育相談を受けることもあります」とのこと。

最後に1年を振り返って参加者全員が話しました。「私はこの活動がとても楽しみです。元気になります」「市民文化祭の『日本語スピーチ大会』では、12名の学習者の自国自慢、日本での経験など内容が深く素晴らしかったし、歌と踊り、特技の披露、民族衣装も鮮やかでした」という言葉にボランティアの思いがあふれていました。

連絡先　大熊（575）0946
y_johanna_ookuma@m2.dion.ne.jp

〈文・写真　三好紀子〉

人がつながる日本語学習

—この「公民館だより」は再生紙を使用しています—

〈サークル訪問323〉

KUNIFA　土曜日本語の会

公民館の一室は、老若男女、様々な国籍の方が集まって、和気あいあいとした雰囲気に包まれていた。思い思いのテキストや新聞を片手に、日本語学習者とボランティアの方が会話をし、交流を深める。言葉が通じないときはジェスチャーを使用したり、写真を指さしたりしてコミュニケーションを図っていた。それぞれの参加者が、自由に交流を楽しんでいるという印象だ。

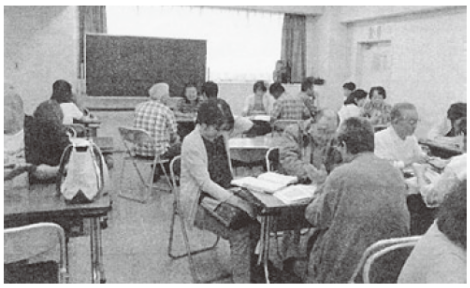
土曜日本語の会のボランティアの方々は、学習者がただ日本語を学ぶのではなく、日常生活で使えるようになるための「実践のパートナー」を担っている。日本語は、外国出身者が日本で生き生きと暮らすためのツールである。そのツールを手にした学習者が、実際に生き生きと生活をしているのを見るのが喜びだそうだ。また、ボランティアの活動を通し外国出身者と話すことで、異文化交流ができることも楽しみのひとつであるらしい。もちろん、日本語自体に興味があってボランティア活動に参加しているという方も多くいらっしゃるそうだ。苦労したことはありますかと聞くと、「学習者の方にわかりやすいよう易しい日本語を意識するあまり、かえって難しい言葉を選んでしまうことがある。でも、だからこそ言葉が伝わると嬉しい」とおっしゃられた。

一年に一度、日本語学習者によるスピーチの会を開催している。出身国のことや日本での生活のことなど、思い思いのテーマについて、覚えたての日本語でスピーチを行う学習者の姿に感動するそうだ。

学習者にとってもボランティアの方々にとってもお互いに学び合うことが多い、素敵な活動だと感じた。

日時：毎週土曜日　朝10時～
場所：公民館　集会室
連絡先　矢崎042（375）5150

〈文・写真　原田千智〉



和気あいあいと異文化交流

いっしょに　たのしく日本語を　まなびましょう！

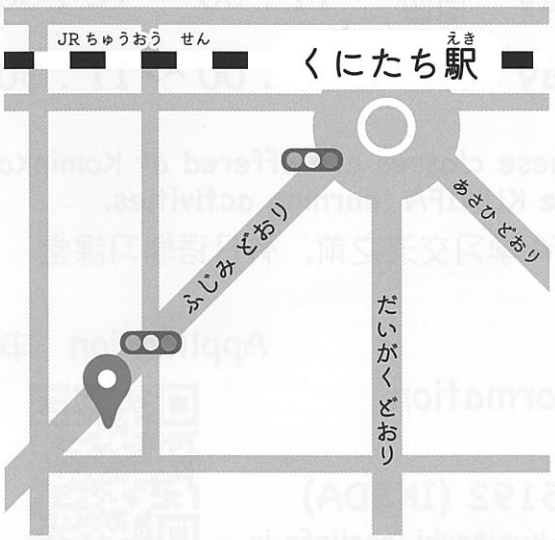
KUNIFA

日本語サポート

わたしたちは　みなさんの　日本語のべんきょうの
おてつだいをします

ばしょ

くにたち こうみんかん
東京都国立市中１丁目１５−１



じかん

＊かよう日	11：30 ～ 12：30
＊すいよう日	11：30 ～ 12：30
＊もくよう日	11：30 ～ 12：30
どよう日	10：00 ～ 11：30

＊ KUNIFA のまえに 日本語こうざが　あります

もうしこみ

といあわせ
080-3003-5192（池田）
https://kunifa-kunitachi.localinfo.jp

くにたち公民館だより

第 771 号
2024年５月５日
（令和６年）
「くにたち公民館だより」ホームページ▶

〈特集：公民館講座紹介と参加者の声〉

身体表現講座
からだであそぼう
―あそぶ・ほぐす・つながる―

「風船になって、ゆーっくり息を吐き出しましょう。体中の悪い空気を外に出して……そうそう、今度は好きなものや自分が心地よいと思うものをイメージしながら息を吸って……」

公民館の地下ホールに、ファシリテーターの大川あじさいさんの元気な声が響きます。月１回、第四土曜日は「身体表現講座　からだであそぼう」の時間。参加しているのは、小さなお子さんとお母さん、シニア世代の方、しょうがいのある方……。年齢も、背景も、みんなバラバラな人たちが同じ時間と空間を共有しています。

ストレッチでのびのび

２時間の講座の前半は、からだをゆるめる時間。風船の呼吸や、足つぼのマッサージ、参加者同士でストレッチをしあったり、ヨガのポーズをしてみたり。からだがほぐれたら、後半はいよいよ表現の時間。あじさいさんが考えてくるお題は毎回実にバラエティーに富んでいます。例えば、〝やわらかいとかたい〟。実際にお豆腐やレンガをさわって、「さぁ、レンガの気持ちになってみて！」「じゃあ今度はお豆腐の動き！」イメージを膨らませながら、カチコチになったりフニャフニャに動いてみたりします。他にも、〝音で動く〟。自然の音やクラシック音楽、はたまた落語を聞いて、その音にからだをなじませていく……。時に笑い時に戸惑う参加者たちに、あじさいさんは笑顔で語りかけます。「正解なんてないから動いてみて！」

そう、ここには「こうあるべき」という答えはありません。自分のからだの声、同じ空間に居る人の動き、その気配や空気を感じ、ある時は触れ合って一緒に、ある時は離れてバラバラに。言葉でなくても、からだで互いのコミュニケーションが紡がれていきます。次ページでは、そんな身体表現講座の多様な参加者の声をお届けします。

互いの動きを感じながら作品を創っていきます。

発　行
国立市公民館
〒186-0004
国立市中1-15-1
TEL 042-572-5141
FAX 042-573-0480
休館日：毎週月曜日

参加者募集中〈身体表現ワークショップ〉

からだであそぼう
―のびのびとうごくワークショップ―

のびのびとからだを動かして、自分を表現してみませんか？　こころもからだも柔らかくして自分の可能性を開放し、仲間と楽しく作品を創りましょう。

ファシリテーター　大川　あじさい

と　き　全８回。５月25日、６月22日、７月27日、９月28日、10月26日、11月30日、12月14日、15日（発表会）すべて（土）昼２時～４時〈予定〉

ところ　公民館　地下ホール（場合により講座室）

対　象　身体を使って表現すること、しょうがいがある人と一緒に舞台をつくることに関心がある方。年齢・国籍・性別・しょうがいの有無は問いません。
※しょうがいのある方は、後日面談の場合あり。保護者の方や、ヘルパーさんの参加も歓迎！

定　員　12名（申込先着順）

申込先　５月21日（火）夕５時までに電話で公民館へ

身体表現ってなんだろう？？

大野　圭介

私たち親子が身体表現講座に参加して、２年となりました。きっかけとなったのは、息子の特別支援学校卒業にともない、それまで土曜日を過ごしていたデイサービスも卒業となったことです。新たな過ごし方と居場所を探し求めていたところ公民館の方からお話を伺い、参加してみることにしました。

考えてみると知的しょうがいしゃである息子が今までどうやって外の世界に接し、環境になじんできたのかという過程は見たことがなかったので、親子での講座参加は、彼の学習や思考など成長過程の一部を間近で見る貴重な時間となりました。私自身、日常生活では、正解があるものに対して取り組む機会の方が多いので、身体表現という正解がないことに取り組むというのは、なかなか難題ではありますが、自分の生きている世界が意外に狭い世界であることも実感しました。

年間の活動を締めくくる発表会では、参加者全体で作り上げる部分が多く、ことばで身体表現を考える大人と、体が先に動き出す子どもたちの一体感が不思議と形になるもので、これでいいのだろうなという充足感が一年間の学びとなりました。そしてまた、この講座で新たな一年を迎える予定です。

←それぞれが動く気配を感じながら

→ダイナミックな表現も

クリスマス会　風、海、動物になって大きくなったり小さくなったりする動きから……

みんなでゾンビダンスでフィニッシュ！

娘と私の余暇活動

トマト（ペンネーム）

「５月！ダンス！あじさいせんせい！ハリーさん！*」と言って新年度の講座を楽しみに待っているのは、私の娘です。彼女は自閉症を持っています。

去年の春、娘が就労し余暇活動を探していたところ、『公民館だより』を見て参加を決めました。親も参加できるので私も一緒に楽しめて、からだを動かせる機会が持て良かったです。ストレッチやからだほぐしでは、毎日慌ただしく過ごしている時を忘れ、からだのこりかたまったところをほぐし、ゆっくり深呼吸してリフレッシュできました。娘も、自分のペースでのびのびと過ごしています。表現では、どう表したらいいか戸惑うところもありましたが、皆さんと一緒に生み出されていく面白さを感じました。

クリスマス会での舞台発表は森の中のシーンではじまり、一人ひとりが木になり、神秘的な雰囲気でした。私と娘は森の中にたたずむ人で、その空間にすっと溶け込み、心地の良い時を過ごしていました。その後、地球の自然をテーマに、小さなお子さんから大人まで一体となって、風・海・動物など色々なものを表現して、迫力のあるステージになり、一緒にいて「すごいなぁ」と感動しました。初めての体験でしたが、とても良い経験になりました。しょうがいしゃと健常者の壁がなく、一緒に活動できるこのような場があることをありがたく思います。

＊担当職員のニックネーム。講座内ではニックネームで呼び合います。

身体表現の講座に参加して

大浦　順子

“身体表現”、聞いたことのない未知の言葉でしたが、公民館だよりの講座案内を見て興味を引かれました。私はシニア世代なので、他の参加者にご迷惑ではないかと参加に躊躇や不安な気持ちもありましたが結果的には杞憂でした。参加者は年齢も性別も様々でした。

１回２時間で、前半はストレッチなど体ほぐしを行います。後半は音楽や様々な音を聞きながら体を動かします。この体を動かすということが、最初は、どうしたらよいのかわからず全く動けませんでした。そのうち、少しずつ動いていました。ある時は落語を聞いて踊るプログラムがあり、そんなの無理、無理と思いながらも全員で踊っていました。音を聴きながら、心が動き、手足を伸ばし、歩き、楽しく踊ることで、心や体がびっくりするほど解放されます。こんな心地よい世界があるのだと感動しました。

５月に始まり12月まで続く講座の締めくくりに全員で作品を作り、公民館のクリスマス会で発表です。最近のヒット曲に乗って全員で踊りました。心も体もしなやかなあじさい先生のご指導はとても楽しい時間です。

←いろんなステップを楽しむ。子どもたちは元気いっぱい！

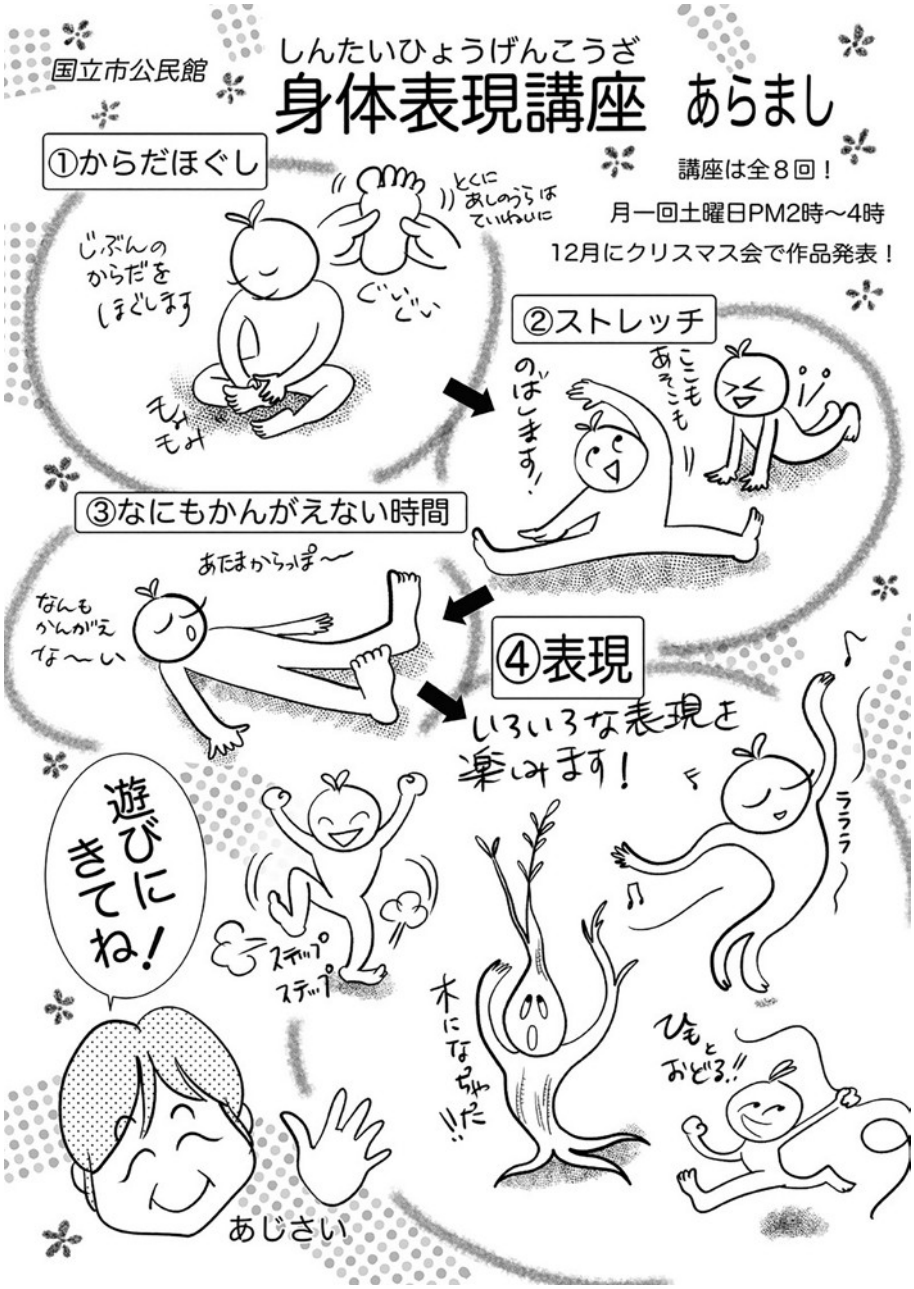
→一人ひとりがつながりながら彫刻を表現

身体表現講座の魅力

大川　あじさい（講座ファシリテーター）

人はそれぞれ違います。
からだも一人一人違います。
みんなちがってみんないい。
身体表現講座では、考えもからだも全然違う人と初めて出会って、
表現することに一緒にチャレンジします。
自分と違う考えやからだに出会って世界が広がるのです。
木になってみよう！
色を踊ってみよう！
正解のないことにみんなで一緒にとりくんでいると……あら不思議、違っているように見えていたのに、中身は同じだとわかります。年齢とか性別とかしょうがいがあるとかないとか、そういう区分けは本当は無いんだ、ということに気づきます。
楽しみながら踊りながら、そんなことを実感できる。
それがこの講座の最大の魅力です。

楽しく動こう！（右側が大川あじさいさん）



ファシリテーターのプロフィール

大川　あじさい

多摩美術大学絵画科卒。
在学中は演劇部に所属し、卒業後も演劇やダンスなどにあけくれる。
2004年、しょうがいのある方と舞台作品をつくる活動に参加（Air ～空～パフォーミングアーツ研究会@八王子）。
以来20年間、しょうがいのある方の身体表現の魅力にとりつかれ、現在に至る。絵画・ダンス・パフォーマンス等、ジャンルにとらわれない作品を制作・発表・模索を続けている。

あじさいさんにQ＆A

Q．講座のはじまったきっかけは？
A． 2010年頃、喫茶わいがやでコーヒーを淹れたり、クラフト講座をお手伝いしたりしていました。そこへ、当時しょうがいしゃ青年教室の担当をしていた職員さんが、「新しい講座をやりませんか？」と声をかけてくださったのです。しょうがいのある方との舞台作品制作の経験を生かしながら、地域の方々と一緒に楽しい講座ができるのではと思い、お引き受けしました。

Q．講座はどんな風にやっている？
A． 図解で、毎回の講座のあらましを描いてみました。講座の最後には、しょうがいしゃ青年教室のクリスマス会に参加して作品の発表もします。

★活動に参加してみたい方は公民館までお問合せください。見学も歓迎！

ひろば

スポーツ吹矢を体験しよう！

暑くても、屋内で涼しく楽しめ、ゲーム感覚で、心肺機能の向上にも役立つ二刀流。体験会に気楽に参加して下さい。費用は無料です。

日時　随時（予約をお願いします）
場所　体育館、公民館、福祉会館、北プラザ
連絡先　坂井090（2449）９１７５

水泳「とびうお」会員募集

皆さん！健康維持、体力増進とストレス解消に温水プールで快適な汗を流しませんか。レベル別に公認コーチが親切に楽しく指導いたします。体験水泳可（無料）

日時　毎週火曜日　昼12時～２時
場所　総合体育館　室内プール
連絡先　横田042（571）６６８８

やさしい水彩の会作品展

ＮＨＫ学園で水彩画を学ぶメンバーの９回目の作品展です。日頃の力作を展示して皆様のご来場をお待ちしております。

日時　９月20日㈮～27日㈮10時～
場所　公民館　市民交流ロビー
連絡先　溝口090（4627）１０１１

今月の公民館（9月～10月前半）

９月13日（金）昼～　多文化共生講座「やさしい日本語を学ぼう」
13日（金）夜　中央図書館開館50周年・公民館開館プレ70周年企画「秋のナイト・ライブラリー」
15日（日）昼　図書室のつどい「文学作品を〈ケア〉で読み解く」
15日（日）昼　版画をつくってみよう！ ―プレス機体験ワークショップ―
17日（火）昼～　哲学講座「長谷川宏さんと読む『日本精神史　近代篇　下』」
17日（火）夜　公民館開館70周年に向けた学習会「『くにたち公民館だより』を読むつどい」
22日（日）昼　CINEVOX（シネボックス）・シネマトーク『スタンド・バイ・ミー』
27日（金）夜～　文章創作／心のライティング「自分を知り、表現し、ともに分かち合う　文章創作ワークショップ」
29日（日）朝～　性教育講座「性を学ぶことはよりよく生きること～『包括的性教育』のススメ～　模擬授業【思春期編】」
10月４日（金）朝～　子育て短歌入門講座「子育ての日々を三十一音で語り合おう」

講座の開催状況などに変更があった場合は、公民館入り口付近への掲示や、ホームページでお知らせします。ご不明の点はお問合せください。
公民館　☎（572）５１４１

▲講座等の案内

くにたち市民オーケストラ第46回定期演奏会

エルガー「コケイン」モーツァルト交響曲第40番チャイコフスキー交響曲第６番　指揮　佐々木新平
入場料千円全席自由高校生以下無料

日時　９月29日㈰　昼２時開演
場所　東大和市民会館
連絡先　事務局080（5445）９２９２

加害者としての戦争を語る会

長年、東南アジアの日本軍加害について、現地で被害当事者から聞き取り調査をし、証言集会をしてきたアジア・フォーラム横浜代表の吉池俊子さんが話す。無料。

日時　９月29日㈰　昼２時～
場所　公民館　地下ホール
連絡先　龍野090（1469）１０９４

くにたち国際友好会ＷＩＮＧ

９月の国際理解講座は、ニューヨークの国連本部でＰＫＯなどを担当され、現在は一橋大学講師の中谷純江（かすみ）さんに、国連から見る世界についてお話しして頂きます。

日時　９月29日㈰　夜７時～９時
場所　公民館３Ｆ講座室＆ＺＯＯｍ
連絡先　西江070（9020）７８３８

ジュニアソフトテニス講習会

プロコーチによる初心者から上級者までレベルに応じたレッスンです。ソフトテニス連盟。対象者中学生、高校生。参加費無料
申込締切９月13日㈮

日時　10月13日㈰９時～予備20日
場所　広場テニスコート
連絡先　芳賀（はが）090（2419）０１６９

〈サークル訪問395〉ダンスセッション

その夜、地下ホールはいつもと違う異次元の世界が広がっていた。自由気ままに踊ったり演奏したり、その偶然性を楽しむダンスセッションの風景である。ドラム、サックス、木琴、リコーダー等、様々な楽器と突然発せられる言葉がない混ぜになって音が創り出される。それに合わせて20代から70代の身体が動き始める。しなやかで伸びやかな身体、飛び跳ねる身体、クネクネした身体、時に固まってしまったかのような身体……それらがいつの間にか共鳴し合い調和を創り出し一体化していくようだ。すべては常識から離れた空間の中で創り出されるダイナミックなダンス。

代表の井上龍達（りゅうたつ）さんは語る。「１９７０年代に、寺山修司・小杉武久・霜田誠二などの巨匠がこのホールを幾度も使用したと、当時の『美術手帖』に記載されている。正にアンダーグラウンド芸術の歴史と魂が宿っている聖地といえよう」。またメンバーのひとりは、今は見かけない柔らかな明かりを作る照明器具、レトロなエンジ色のカーテン、踊るのに最適な板張りの美しい床、音の響きなどをあげ、こんなに素晴らしい空間はないと言う。今まで何気なく使っていた地下ホールが一気に神聖で特別な場所に見えてきた。

人間は言語を持つ前に身体を使い表現、伝達していたのだろう。踊ることで現代人が失った何かを表現し太古の人間に帰っていくのかもしれない。踊った後の皆さんの清々しくも優しい表情は、それを物語っているように思える。

興味のある方は、ぜひダンスセッションの世界を覗いてみてほしい。身体が自然に動き出すに違いない。

日時　毎月土、日のいずれか１回　夜６時～９時半
場所　公民館　地下ホール
連絡先　井上
tatatata2108@gmail.com

〈文・写真　高木　裕子〉

聖地で踊る！

哲学講座が20年目を迎えます

2004年度より開講してきた公民館主催の哲学講座「長谷川宏さんと読む一冊の本」は、今年度で20回目を迎えます。これを機に20年間の哲学講座と講座から生まれた「哲学読書会」の活動をふり返る文章を市民の方にお寄せいただきました。初参加の方もぜひご参加ください。

〈哲学講座〉

長谷川宏さんと読む『日本精神史 近代篇 上』

講　師　長谷川　宏（哲学者）

ヘーゲルの翻訳や哲学研究で多くの著作がある長谷川宏さんを講師に、10月に刊行された自著『日本精神史　近代篇　上』をテキストとして「哲学講座」を開講します。

幕末の大転換期から20世紀の終わりにいたるまでの130年に及ぶ時代の精神を、美術・思想・文学の三領域にわたる文物や文献から長谷川さんと読み解いてみませんか。

人々の作り出した近代における壮大かつ激しい精神の大河を、５回にわたって探求します。

※テキストの『日本精神史　近代篇　上』（講談社選書メチエ）をご用意ください。

〈長谷川さんの著訳書〉

ヘーゲル『精神現象学』（作品社）の翻訳でドイツ連邦政府翻訳賞受賞。『初期マルクスを読む』（岩波書店）、『高校生のための哲学入門』（ちくま新書）、『ことばをめぐる哲学の冒険』（毎日新聞社）、『双書哲学塾　生活を哲学する』（岩波書店）、『ちいさな哲学』（春風社）ほか多数。

と　き　１月13日、20日、27日、２月10日、17日（全５回）いずれも土曜日、昼２時～４時

ところ　公民館　３階講座室

定　員　30名（申込先着順）※原則全回出席できる方　市内在住者優先、定員に達しない場合は市外在住者も参加可能

申込先　市内在住の方　12月12日（火）朝９時～
市外在住の方　12月19日（火）朝９時～
公民館☎（572）５１４１

▲哲学講座の様子

地域の公民館で、大人が学ぶということ

哲学読書会　富田　和枝

先日、某所で東京大学名誉教授の佐藤一子さんの「九条俳句訴訟」のお話を聴いた。さいたま市公民館だよりで「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」の俳句が不掲載となり、作者が提訴、最高裁で勝訴となった件である。

お話で印象に残ったのは、作者の属す公民館のサークル「俳句会」はお互いに批評することで深い相互学習の機会となっているとの弁護士解釈、佐藤さんが他の公民館への電話取材で聞いた、公民館は文化創造をしていて、地元文化人と市民の活動に公民館側で意見は言いませんという回答。

20年前、公民館の職員さんの一人が在野の哲学者・長谷川宏さんを見つけて、企画してくれた哲学講座「長谷川宏さんと読む一冊の本」は、まさに日々を暮らす市民と地元文化人（先生は近隣市在住）の、互いに議論をする相互学習の場であると改めて気がついた。

そして、講座が始まった直後に生まれた、私たちの自主サークル「哲学読書会」も20年になる。毎月第一土曜日午後に、自分たちで選んだ一冊の哲学書を下敷きに、激しい議論を交わしている。最近、NHK・Eテレ「100分で名著」でもやっていたが、古代ギリシャのアリストテレス倫理学の中庸な考え方が、現代を生きる自分たちにもある種の参考になるよねと話し合ったり、『人間の条件』でハンナ・アーレントの言う人間の条件は政治参加でしょという私の解釈に皆が賛否を呈したりする。そして、参加者たちは新たな月の毎日の暮らしの場に散っていく。

20年の間に、参加者は様々入れ替わった。別の活動に旅立った若い人たち、物故した方たち、読書会に参加しつつ地域の活動に活躍する人、新たに他市からはるばる参加して来る人、日常から離れて爽やかな時間が過ごせると言ってくれた困難を抱えた人……。

私自身は、哲学講座そして哲学読書会こそ「自己学習と相互学習で学ぶことの最たるもの」、人生に欠かせないものと思っています。

講師の長谷川宏さん

哲学講座について

哲学読書会　石垣　礼子

長谷川宏さんの国立市公民館での哲学講座が今年度で20年目になると知り、長きにわたり、雪の日も、講座を欠かさず市民のために続けてくださったことに感謝申し上げたいと思います。

ひとりでは難解だと思われたテキストも講座で共に読むことで異なった視点が与えられる。その気づきには発見の楽しさがあり、いわゆる哲学思想も私たちのふつうの生活からかけ離れたものではないことを学べた、市民講座らしい貴重な機会だったと思います。

講座の中では長谷川先生が書物の世界だけではなく、主宰する〝赤門塾〟で子どもたち一人ひとりに真剣に向き合ってきたこと、そうした現場を大切にしてこられたことを感じます。美術、文学など作品への向き合い方、戯曲は赤門塾の演劇祭など塾の行事とも深く関係していることを知りました。

長谷川先生は、私が初めて参加した2005年のテキスト『同時代人サルトル』（講談社学術文庫2001年）の著者あとがきに「サルトルを論じつつ日本の戦後という自分の生きた時代をふりかえってみたい、という思いがあった」とすでに書いておられます。

日本の近代から戦後にいたるまでを描くという思いを実現された『日本精神史　近代篇』の講座を楽しみにしています。

国立市公民館主催「哲学講座」使用テキスト一覧

開講年	使用テキスト	著者	出版社
2004	『社会契約論』	ルソー	岩波文庫
2005	『同時代人サルトル』	長谷川宏	講談社学術文庫
2006	『美術の物語』	ゴンブリッチ	ファイドンジャパン
2007	『先祖の話』	柳田国男	ちくま文庫
2008	『芸術の体系』	アラン	光文社古典新訳文庫
2009	『自由論』	ミル	光文社古典新訳文庫
2010	『経済学・哲学草稿』	マルクス	光文社古典新訳文庫
2011	『ハムレット』『リア王』	シェイクスピア	白水社
2012	『曽根崎心中』『心中天の網島』	近松門左衛門	新潮社
2013	『徒然草』	吉田兼好	岩波文庫
2014	『忘れられた日本人』	宮本常一	岩波文庫
2015	『日本精神史（上）』	長谷川宏	講談社
2016	『日本精神史（下）』	長谷川宏	講談社
2017	『日本精神史（上）（下）』	長谷川宏	講談社
2018	『幸福とは何か』	長谷川宏	中公新書
2019	『戦後思想を考える』	日高六郎	岩波新書
2020	『苦海浄土』	石牟礼道子	講談社文庫
2021	『柳宗悦』	鶴見俊輔	平凡社選書
2022	『歴史とは何か』	E・H・カー	岩波新書
2023	『日本精神史　近代篇　上』	長谷川宏	講談社選書メチエ

〈サークル訪問277〉

哲学読書会

「次はハンナ・アーレントを読むのよ」。そんな一言に誘われて、本棚でほこりをかぶっていた『人間の条件』を引っ張りだした。

参加したのは、毎月第一土曜日13時から17時まで、公民館で活動している「哲学読書会」。在野の哲学者である長谷川宏さんの講座参加者が始めたサークルで、9年間活動を続けている。

何ってまず驚いたのは、いきなり本を読むのではなく、最初の1時間程度「哲学カフェ」という雑談の時間を設けていること。ある参加者は、「カフェと読書会がミックスされているのがよい。雑談からいろいろな話が聞けるし、哲学は現実世界のことと結びついている」と話す。

話題の政治ニュース、最近見た映画、本等、多岐にわたる話のあとで、いよいよ読書が始まる。ここで特徴的なのは、文章を区切って順番に音読し、その内容に対して議論を交わすことだ。一人だと読めなかった本も、声に出して読み、それを聞き、更に話し合うことで理解が深まっていく。にぎやかな議論は途切れることなく、本の内容から発展して、様々に話題が広がる。原発問題に話が及んだときには、「アーレントに学べるのは、経済からではなく、人間としてどうすべきか考えるのが大事だということよね」という意見も出された。

メンバーは、40歳代から70歳代を中心とする約15名で、男女比は半々くらい。普段の生活も職業も様々。近郊他市、他県から通う人もいる。会の永井さんは、「普段はそれぞれの日常生活を送っている人々が、毎月集まってくる。この人間関係が尊い」と語る。

本を読み、議論することはもちろん、哲学を通して人とつながり、様々な刺激を受けることも会の醍醐味となっている。

連絡先　富田（575）1820

〈文・写真　島本優子〉

「難しくてわからないね」と笑い合うのも楽しい